



マヌエル・
アレハンドロ・
ペレス・モラレス
(オカタ)

活動:
ビジュアルアーティスト
キューバ日系人連絡会
メンバー

マヌエル・アレハンドロ・ペレス・モラレスさんへのインタビュー

ビジュアル・アーティスト「マヌエル・オカタ」



マヌエル・アレハンドロ・ペレス・モラレスさんは、27歳、日系4世にあたります。日本の姓は「岡田（オカタ）」。マヌエルさんはその名前を誇らしげに、アーティスト名として使っています。キューバ国立芸術大学(ISA)で舞台芸術の学士を取得後、フリーランスのアーティスト兼デザイナーとして、日本とキューバの異文化を融合した作品を制作しています。

2014年、シエンフエゴス県の造形評議会のギャラリーで、同県造形アカデミーの卒業展「HAIKU」が開かれました。アーティストの名前はマヌエル・オカタ。それぞれの作品には松尾芭蕉や与謝蕪村の俳句が付されています。7年後、2021年、サンティアゴ・デ・クーバ県で開催された国際俳句フェスティバル「赤い月」にも、オンライン上で俳句が付された彼の作品が掲載されました。どちらの年代の作品も、あまりに小さく無造作なため、人目に止まらないような、それでいて美しい静物の一瞬を捉えています。2014年と2021年では技法に大きな違いがあります。また、2021年の作品にはマヌエルさん自身の俳句が付されています。

このように日本とキューバの文化を自身の作品で融合するマヌエルさんに、特に影響を受けた芸術家について質問すると、ヴァン・ゴッホ、エゴン・シーレ、イリヤ・レーピン等の西洋の大御所に加え、松尾芭蕉の名をあげました。「日本の詩、特に俳句が、自分の活動に意識的に入ってきた時期がありました。

儚い瞬間の美しさをとらえるのは、とても面白い作業です。」自身の絵画作品を見せながら答えました。

最近はどういう作品を作っているか尋ねると、キューバの大衆芸能（"Teatro Bufo"）と日本の大衆芸能（主に歌舞伎や狂言）の役柄のデザインの融合を試みたイラストを見せこう語りました。「これらの作品は、大学の卒業論文で研究した日・キューバ大衆芸能の比較の過程で作成したものです。卒業展で公表予定でしたが、感染症流行でイベント自体が催されませんでした。いつか何かの形で世に出したいです。」



2014年、シエンフエゴス県造形評議会ギャラリー、マヌエル・オカタ展覧会「HAIKU」

川満ちて 静かな石の 角落ちる



2021年国際俳句フェスティバル「赤い月」
に掲載されたマヌエルさんの作品

また研究成果につき、歴史背景も地理的環境もまったく異なる二つの国の大衆芸能に、社会情勢をコミカルに描く方法、特に主な登場役柄に類似性があることを説明しました。例えば、日本では道化が、滑稽な面を敢えてつけることで人を楽しませますが、キューバでは「エル・ネグリート」（El negrito）がそれに相当し、肌が黒くない人が顔

を黒く塗りおどけた役を演じます。「二国のユーモアの表現に、多くの類似点があることを知り、心が温まりました」と語りました。キューバと日本の文化的距離を縮めようと、ビジュアルアートという形で融合を試み続けるマヌエルさん、そのインスピレーションはどこから来るのでしょうか。



インスピレーション

マヌエルさんの家族はシエンフエゴス県出身で、かつて、マヌエルさんは、海を渡り遙か日本から、ペルーを通過してキューバにたどり着いた母方の曾祖父母の冒険話に胸を躍らせていました。実家には「誰も読めない手紙や、誰だかわからない人たちの写真」が大切にしまっており、それらが沸騰させる疑問と無知は、彼にアート制作へのインスピレーションを与えました。

また、日系2世に当たる母方の伯叔祖母（大おば）の息子（マヌエルさんの従兄弟叔父にあたります）の家に集まり、小さいころから一緒に日本の踊りや歌を歌い、日本食を口にしていたといいます。「物心付いたら、どんな些細なことでも、日本は自分の日常にありました。そしてシエンフエゴスの子どもたちに折り紙を教えたり、俳句を意識して絵を描くようになったりしました。」と語ります。

2018年、マヌエルさんは日本の文部科学省が実施する日本語・日本文化研修留学生として新潟県に滞在しました。その機会に西新潟市の市民会館で行われたグループ展「さかいわ美術展」にも出展し、アーティストとして日本デビューを果たしました。また、滞在中には、書道や墨絵の愛好家の方々のワークショップにも参加し、墨絵や書道に親近感を持ち、自分に合った表現方法だと感じたということです。

日本への留学は、自分のルーツを探す旅でもありました。残念ながら、マヌエルさんの祖母は日本の家族とのつながりを保つことができませんでしたが、マヌエルさんは「祖母が活着している間に果たせなかったからこそ、自分がやらなければならない使命」だったと、家にあった手紙に書かれた住所を訪ねました。

“

「・・・シエンフエゴスの子どもたちに折り紙を教えたり、俳句を意識して絵を描くようになったりしました。」



小学生に折り紙を教えるマヌエルさん

最初に訪れた沖縄県では大変な苦労を重ねたにも拘わらず、親戚に会うことはできませんでした。（しかし、彼の努力と粘り強さが生んだ手がかりのおかげで、彼の従姉妹たちが後に日本を訪れた際には、沖縄の親戚に会うことができたそうです。）

次に訪れた曾祖父母の出身地である山口県長門市では、曾祖母がキューバに発つ前に日本に残した娘の息子にあたる男性に会うことができました。マヌエルさんが、曾祖母が大切にしていた写真を見せると、その男性はすぐに自分や、自分の母親を認識したといいます。また彼は、マヌエルさんと同じ「岡田」の苗字を持つ曾祖父の親戚の家にも連れて行ってくれました。「すぐに他の日本の家族が僕に会いたいと駆けつけました。会ったばかりの人たちが、いきなり家族になりました」と笑います。「その後は、他の県に住む親戚にも招待をいただき、日本が一層身近な存在になりました。」この話は中国新聞にも取り上げられ、慣れない日本語でマヌエルさんが伝えた名前が、「オカダと濁らない。それが決め手だった」そうです。実際に日本で「手紙に書いてある場所を訪ねたり、写真に写っている人たちと会ったり、言葉を覚えたりしたことで、疑念が払拭され、感情でいっぱいになった」そうです。

日本訪問前と後では、マヌエルさんの日本に対する思いは全く違ったものとなりました。日本に対する思い、それが彼のインスピレーションの一部なのでしょう。そして、これからも日本について学び続けていきたいと語ります。2021年の作品に彼自身の俳句が付されているのは、彼の中で「日本」との絆が強くなったからではないでしょうか。



2019年、マヌエルさんによる岡田しずおさんとその奥さんの絵

キューバ日系人コミュニティの中で

2016年、当時の安倍晋三総理がキューバを訪問した際の重要な活動のひとつに、キューバの日系人社会のリーダーらと会談し、日本と移住先の国の友好を深めるために彼らが行っている活動を確認するというものがありました。マヌエルさんは、山口県にルーツがあるという意味で安倍元総理と偶然にも共通点があり、会談メンバーの一人として選ばれました。総理の訪問が、日系人連絡会との初めての接点でしたが、その後は日系人連絡会の主要メンバーとして活動するようになりました。同会の運営に関し、「連絡会が主催していた活動に参加してきたおかげで、僕は子供の頃からお互いを知っているし、僕たちの先祖と同じように、日本文化を愛し、日本文化への



2016年 安倍晋三総理（当時）の日本人墓地訪問

憧れを抱いて育ってきました」と言います。一緒に行う活動が日系人コミュニティの結束を深め、日系人自身とその歴史を知ることにつながると分かっているからこそ、マヌエルさんは連絡会に参加し続けています。「私たちみんなが、キューバ全国に散らばったひとつの大きな家族なのだと感じています」と話してくれました。

インタビューの最後にマヌエルさんに将来の夢について聞きました。「とても難しい質問ですね。」と前置きをした後に「キューバと日本は、全く異なる世界に属しますが、僕の作品を通して、この距離を縮めたいと思っています。」と優しい声で答えました。「また、個人としては平穏と、安定、自分の場所を見つけたいと思っています。」と、日本とキューバそれぞれの自分のルーツに対する責任感が感じられました。二つの国のアイデンティティを作品に表現できるのは、マヌエルさんの美德ではないでしょうか。

